雜　錄

創造的衝動と生産的衝動に就て

園　頼　三

一

世間では不生産的な仕事と生産的な仕事とを區別してゐる。君は何をやつてゐる？、フン、文學、不生産的な人間だね、と恁う云ふ口調の中には生産的な人間を尊重して不生産的な人間を輕蔑する意義が含まれてゐない場合は、稀ではないやうに思はれる。少くとも生産的といふ言葉に對し、之に否定を附けると云ふのは、暗に非難若くは低價を意味してはゐはしないか。丁度、道德的に對し不道德と云ふやうに。

それでは所謂「不生産的」といふ否定的形容詞不道德の夫れの樣に、肯定詞を與ふる値のないものだらうか。夫れは今問はないにしても、不生産と云ふのは不道德と云ふのと同じく、明亮な內容をそれ自身に持つてゐないものなのだらうか。私は否定だけでは曖昧であるのみならず、立派に之を表明すべきものと思ふ。表明を要求する內容があると思ふ。私は「創造的」(Creative) と云つてよいと思ふ。

扨て、普通云ふ「生産的な人」と云ふのを考へて見ると、物を造る人、需要に應ずる物を呈供する人、を擧げることが出來る。物を造ると云ふがそ

は、れは需要せられる物の意味である。財貨である。之は言ふ迄もなく生活に直接必要なる貨物である。主として衣食住の直接要求を充たすものを指す。農夫、漁獵夫、職人及び商人を生産的な人となすのは普通の見解であるやうに思ふ。

單に衣食住の資を供給すると云ふことであれば農夫、漁獵夫及び職人で充分である。けれども是等の資は所謂財貨として、複雜なる需要供給の關係を複雜なる社會の中に織込んでゐるものである。即ち所謂經濟的活動として考察せらるべき性質のものである。夫故に、主として此の經濟的關係の掌握者として商人を加へなければならぬ。それのみではない農夫漁獵夫及び職人の活動も、廣き意味の經濟的關係に繫がらずにはゐられない。

それであるから、「生産的な人」は經濟の活動に從事する人の意味を持つと云つてよい。

私は是れ以上經濟學に這入る必要はない。何となれば、所謂「生産的な人」の心理を伺ふのが私の重な興味であるから。又興味が茲にある以上、必ずしも嚴密な經濟學上の部門分けに從はねばならぬことは私の苦痛として堪へ得ない處であらう。

分配及消費に關する考察をも含んだものとして、所謂「生産的な人」の活動の心理を伺はんとするものであることを豫め注意願ひ度い。從つて、農夫、漁獵夫、各種の商人及び商人を所謂生産的な人となすばかりでなく、農夫漁獵夫等原始的にして又比較的單純な生業者より、製造家企業家等近世的にし又複雜なる計劃者に至り、生産の方法に關する、若くは經濟的活動の方法に關する、よりよき方法の工夫者たる機械發明並に改良家を加へ、所謂實業家商人を皆此の「生産的な人」と見做したいのである。

之等の人々の活動は如何なる心理を持つてゐるかを概觀するに當つて、所謂「不生産的な人」たる

創造的な人とは誰かを知つて置く必要がある。何となれば兩者は肯定と否定の關係である樣に普通見られてゐるから、一つを明にせんとするには勢ひ他を引き出さねばならないから。

創造的な人とは簡單に創造を仕事とする人であると云へばよい。創造とは如何なるものかを述べようとするは私の計劃であるが、先づ創造は誰が行ふかを尋ねるのが準序である。私は、藝術家を以つて典型となす精神的從業者を擧げる。けれども其特徴を誇張する意味に於てなら、藝術的活動に從事する人——藝術家を創造的な人となすに差支へはないと思ふ。

二

それに次で考へなければならぬことは、生產的な人は生產的な仕事をすると云ふことである。至つて平凡なことであるが、人に此の生產的なる語を附けて其性質を限定すると云ふ以上、その奥に必要がなければならぬ。卽ち生產的な人は生產的な仕事をするとして、生產的な仕事をせざるを得ないのである。內に生產的な仕事をせざるを得ない强要を持つとして私は其處に生產的衝動の存在を考へる。

創造的な人は創造的な仕事をするとして、又せざるを得ない强要を內具するとして、創造的衝動なるものゝ存在を想定するのである。

此兩種の衝動が動くところに兩種の活動が現はれるのである。今兩衝動を其活動する重なる領土の名によりて命名すれば、生產的衝動は經濟的衝動、創造的衝動は藝術的衝動である。經濟的活動と藝術的活動。並に經濟界と藝術界との區別は勿論人の認めるところである。

經濟界に於ける經濟的衝動は、よりて以て充足せられる材料に向けられたとき、先づ其の物質としての力、內容、及び形體を尊重する。藝術界に於

ける藝術的衝動は、其材料に向けられたとき、其物質性は止揚(アウフヘーベン)せられる。語を換へれば物質として大切なのではない。物質を通じてなされるものが大切なのである。

前者に必要なのは、物質としての力、內容及び形體等であつて、それに就て苦心し努力する。殊に其生產に就てする。然るに後者は之を生產することなどには心を勞せず、只之を驅使することに腐心する。驅使して精神を、思想を、自己を表現せんと焦慮する。

從つて前者は材料に就て、目的此の中にありと言ふことが出來るが、後者に於ては左樣云はれない。目的此の外にありと言ふべく、前者は之を目的とする場合、後者は之を手段とする。之を活動の概觀に移せば一は物質的他は非物質的と云へよう。又彼の實用、非實用の語も變へ用ゐることが出來る。

卽ち經濟活動は實用的で、藝術活動は非實用的である。而して實用の意味は實際生活の用途にある。實際生活は衣食住を基本的必要とする。蓋し、物質的資料に關するものである。卽ち實業生活の支持を遂行するの意味に於て實用的なのである。創造的衝動は此意味で實用的である。創造的衝動は、物質的資料に關する活動をなさず衣食住の基本的必要に應ぜず直接實際生活の用途に合しないその點で、所謂非實用的である。

ところで假りに、實際生活の支持を最高と見る見地からせば、創造的衝動の仕事は不生產的である。そして不生產と云ふことそれ自らが、不道德のそれの如く、排斥若くは低價を意味してゐるのである。何故ならば不生產的とは非實用的のことであるからである。

飢ゑた人には唯だそれパンと肉である。珍貴な料理の沙汰ではない。凍えた人には着物であれば

よい。綺羅金繡を要しない。宿なしに取つてサンやギャラリーは用がない。

三

吾々は此の概觀を得た上は、進んで稍微細な心理に這入ることが出來る。その一歩として、生産的な人と創造的な人との對峙を考へなければならぬ。要するに一見、犬猿も啻ならぬ消息を認めなければならぬが既に述べた樣に、「不生産的」の語に非難と低價の意を含ませて話すのは、誰かと言へば多くは實際生活の支持を唯一最高物と見る人である。經濟的活動を營む人及び之に大なる價値を見る人、所謂「生産的な人」に多いやうである。

反之、所謂「生産的な人」を俗人となし衆愚と見做し獨り昂然として天才を以つて任じ少賢を誇つてゐるのは所謂「不生産的な人」――藝術家である。

此の種の水掛論は古來世間には仕末に負へない程澤山ある。此以上の言を要しない程、兩者の對立は明瞭である。しかし、兩者は果してそれ程氷炭相容れないものだらうか。銘々の立場は勿論移すことは能きぬ。しかし一方立場を明晰にすればするだけ、他方に於て相互の理解と認容とを生じはしないか。私はそれを信ずるものであるが、それをなしうるものとは思はない。

が、それを試みた人としてデッソワールの見解を面白く思ふものである。デッソワールによれば世間の所謂「生産的な人」は「生産人」(Zeugungsmensch)で私の所謂「創造的な人」は「製作人」(Leistungsmensch)である。生産人は良好なる健康を以つて他の多くの生活目的を統率する目的とする。然るに製作人に取つては左樣ではない。生産人は是非とも壯健でなければならぬとするが製作人は肉體の健康に對する願望を最小限度に低下

する。それは、仕事のためには健康を犠牲にすることを辭せないの意である。蓋し、藝術的創作は過度の精神的煩勞――苦痛(ライデン)や疼痛(シュメルツ)の下に生れるものであり、此の苦痛や疼痛は、精神的發展には不可缺る附隨物であり精神の內面化を助けるものであるからである。丁度、小兒の齒が生え初める時、そこに不可避る熱と疼痛があると同じである。偉大なる藝術的事業は多く病的現象の下に現出する。それだから偉大そのことが病的であるかの如くに見做されるのである。斯くの如く兩種の人は明かに相反對する。之れは健康に關して其の一端が見えた迄であつて、其相違は生活の方向、目的及び存在の任務に就て現はれてゐる、とデッソワールは考へ其の根本理由に就いて次の點を認めた。

人類種類の支持の爲めに生れたのが生產人で、或る事業を成就すべく生れ來つたは製作人である、前者の營む處は支持生活(エルハルツングスレーベン)、後者のは向上生活(エルヘーウングスレーベン)である。但し、後者に關し天才と狂氣を兄弟と見るは誤りであつて、目的論的に見て其本質を異にする。卽ち天才は前方を指示し狂人は後方を指示する。

吾々がデッソワールに依りて知りえた支持と高上は、兩種人の人類に對する目的關係に於ける夫夫の立場を明示するものである。それよりして吾人は又其の密接にして相互に大切なる關係を認めてよいと思ふ。

四

デッソワールの說を待たなくとも、生產的な人の仕事に自然的(ナテュラル)で無理がない、しかるに創造的な人のは自然的でなく且つ無理があることは略ぼ誰でも推察しえられる。其意味で經濟的事業には多くの人が從事する。又從事しえられるが、藝術的事業は少數の人しかやらない、又やれないのであ

る。少數の撰ばれた人のやるものだ。

他方から云へばデッソワールの言ふ樣に、人類種族の支持は殆んど全體が寄つてやらなければならない。が、人類の高上は所謂身を殺して仁をなす式の特殊な人を待つことが大である。前者は量により、後者は質によりてなされるものであることが考へられる。

明な生産的事業は、其の衝動が向けられるとき、其の材料は物質として價値を具現し目的を其の中に體し實用に應ずるのである。其のプロセスは平明（プレーン）である。

反之、創造的事業は、其の衝動が向けられるとき、材料は驅使せられ物質性は止揚せられ目的は此外にあり實用に合せないのであつて其のプロセスは逆説的（パラドクシカル）である。

生産的衝動によりて、そこに明に夥しき産出が現はれ、物質が充滿する。然るに創造的衝動によりて世界は餘り嵩を增さないのである。增さないのみならず消費せられるのである。それよりして、創造的衝動の活動する世界は物質的世界でないことが知れよう。

ベルグソンは生活支持の賦性として本能（インスティンクト）は、身體的機關の運用を司つてゐたが、複雜化した生活の支持には本能の外に理智（インテンクト）を、諸種の器具機械の發明や使用の爲めに必要とするに至つたことを述べてゐる。

生産的衝動の活動は物質に關する活動であつてベルグソンの言つてゐる本能の如きものであつたが、社會が發達して來ると、複雜な心性（メンタルキュラクター）を備へる。丁度理智が器具機械の發明や使用に必要となつて來たやうに。

器具機械の發明や使用のことを言へば、生産的衝動が之れに向つて進まずにはゐられないのである。

複雜な心性を取つた生産的活動は、斯くして器具機械の改良及び發明の方に向ふのである。それから、廣く經濟的活動となれば言ふ迄もなく、商業許畫や取引の複雜なる心的活動となる。此等の機械發明家や實業家は、最初の漁農夫等とは比較にならない程、敏活なる精神の所有者である。

斯くして、吾々は、純精神的世界に住む藝術家と、物質的世界を發達點となせど、漸次精神的世界に向ふ機械家や實業家とを比較しうる場合に到着したのである。如何なる異同があるか。とに角兩種人の關係を考察する準備は略ぼできた。

生産的活動に從事する人と創造的活動を行ふ人とは、一見して其人の態度の上に異なる處を認める。前者は實際家、後者は空想家と云つた處がある。之は平常の活動より、その人の生活の內をくぐつて來て現はれた一種の型(タイプ)である。

前者の國民の上に殊に著しく現はれてゐるものとして米人を考へることが出來る。佛の心理學者リボーは此種の實際家の心理にも、空想を認める人であるが、氏は次の樣に解釋してゐる。

實際家(簡單な種類の)とは本來或る特定の創造に當てがはれた人ではなく、瞬間的必要、個々の必要、人間生活に絕えず浮んで來る小さな必要に應ずる小工夫をなす人を云ふ。其の人はエルフインデリウシエル工夫(發明)的、エルギーピエル生産的、ペトリーブギエル工業的精神であり自らを救ふことを知る人である。

氏は米人を以つて好適例となし、米人は活動的、企業的で、又容易に其職業を替へると云つてゐる。道德家などは此の動き易い性質や常なき有樣を非難するが、リボーは、之は活潑なる空想を持つてゐるからなのではなく、固定的でないから、空想が湧くのであつて、吾々はそこに創造の「發動的(リッシエ)」根柢を認めなければならぬと言つてゐる。そして、運命、偶然などの迷信的觀念が、或は因果(リテート)の形や、類推(アナロギー)や魔法的勢力を以つて實際家の頭腦を支配してゐると述べてゐる。

吾々が普通、事實に則し、事實の確實なる關係のみを見てゐると思ふ實際家に於て、リボーの說に信を置いてよいとすれば、生產的な人と創造的な人との差異は追々縮小されて行くのを感じる。しかし、その前に、見分けることが出來る差異を今一つ附け加へて置きたい。

生產的衝動が材料に向つた場合、——例へば綿花に向つた場合、之に加工して綿絲に化することが目的である、創造的衝動が材料——例へば大理石に向つた場合、その目的は、之を驅使し之を通じて或る精神的內容を表現することにある。此事は旣に述べた處で、生產的衝動の方は目的は物質に關係し材料の中にあるが創造的衝動の方は精神にあり材料の外にある。

しかし、今之を、生產的——經濟的活動、創造的、藝術的活動そのものから見ると、中と外とが轉換するのである。經濟的活動は生活の爲めになされる。されなければならぬ。しかるに創造的活動は必ずしも生活の爲めにはなされない。誤解のない樣に生活の意味を限定して置く。實際的肉體的社會的意味の生活である。

それで經濟的活動それ自身が目的なのではない、生活が目的である。藝術的活動それ自身が目的なのである。活動そのものゝ中に滿足が得られ喜びがあり目的があり獨立の意義を持つ。目的は此の中にあるのである。決して生活の爲めではない、——生產の爲めではない。經濟的活動は活動そのものが其人を滿足させ、安住させはしないのである。目的は此の外にあるのである。貴き生活の支持を目的とする。生產を目的とする。生產より生ずる利益を目的とする。

五

實業家若くは商人は如何なる心理を持つて働いてゐるか。

藝術は物質そのものが目的ではなく物質を通じてなされる仕事が目的である。丁度その樣に活動そのものが目的ではなく活動によりて得られる物質若くは利益を目的とする實業家若くは商人は、それならば活動を重要視しないかと云ふにそうではなく、非常に大切にする。何となれば其の活動によりて獲得せらるゝ處のものを切望する人であるから、活動はよし目的としてゞはなくとも、實に手段として必要且つ重大である。

此の意味に於て、彼等の活動の心理には特殊なメキャニズムがある。此方面でリボーの研究は聞くべきである。

リボーは先づ「商業的」の語を最も廣義に解釋し商業的精神活動は生産や財貨分配を主要目的とし、個人的或は集合的蓄財の爲めに工夫をなす構成的想像の諸形式であると考へてゐる。

商業及財政上の發明と云ふものは內外の條件に從ふ。外的條件は地理的、政治的、經濟的社會的等で、時、處、民によつて變動する。從つて人間的で社會的である。內的條件は一方には先見（Vorausicht）打算（Berechnung）理性の確定、約言して反省（マヤトデヤレフレクシオン）の力、他方に於て、大膽（Kühnheit）冒險心（Verwegenheit）未知を追ふ衝動（Trieb ins Unbekannte）略言して能動の力（Macht der Aktivität）を數へる。即ち、熟慮的と冒險的との二面がある。が、前者には悟性（フエルスタンド）が勢力を揮ひ用心深く（先見的）利己的で、大なる道德や社會の思惑から離れてゐる。後者を支配するものは能動的感情要素であつて向上を望むものである。廣く此の方面の天分を發揮したのを歷史に求めるならばティル、カルタゴ及び希臘の通商航海者、中世紀の行商人十五六及び七世紀の射利的征服者、其後の社會變動に供ふ大商會（コンパニー）、專賣業（モンポール）、米國的合同（トラスト）等の創設者、などである。

斯く論じ來つてリボーは商業及財政上の發明には、必要なる心的要素の作用の存在することを述べ、先づ其の發明の發端は萠芽としての直觀（インティユイション）、發展並に組織時代には模型的表象（シエマティツシエビルド）の力を認めなければならぬと考へてゐる。

リボーは直觀の普通の解釋として目的に奔注する實際的直接的判斷となし、氣配（ウイテルヘンツ）、兆（Divination）が其自らの表現であると見、商業的發明に此直觀の必要なのは、迅速且つ正確に物を見、そして都合よき機會を捉へるからである。

世人の言ふ處に從へば『實業家の天才は價値の動搖に就て確乎たる斷定を造る能力に存する』のである。醫者が患者の兆候から直ちに病氣の本體を探り出し、政治家が人を知り、商人が善き企業を嗅ぎ附けるなぞは直觀の例である。直觀は教養の程度には關係しない。無學者、農夫や野蠻人にすら之を認めらるのである。と云つて恁う云つた丈けでは直觀そのものを說明しえたのではない。然れば直觀とは如何なるものか。直觀は特殊な經驗を豫定してゐる。之れによりて判斷に價値が生じ意義を取るのである。

次に直觀は來るものに對する豫想（アンティシペーション）（豫感）である。其の方法には二つある。即ち歸納的若くは演繹的推理と、想像即ち表象の構成との二法である。直觀は想像による結合よりは寧ろ論理的作用に近い。それで無意識的推理と比較することができる。直觀なるものは、遂には推論と同じ値ある一つの判斷となる。しかし、此判斷は常に必ずしも正當であるに限らない。唯だ明かな前提なしに、如何にしてそれに到達するかを知ることなしに、或る一つの結論に達する働き（アクト）を云ふのである。正しき結論に達するのは其の一つの特定の場合なのである。正當（正確）と云ふ點に此の作用のオリジナリティがあるのではなく迅速の點にあるのだ。

凡そ發明には心理的機制（サイコロジカルメキャニズム）と云ふものがある。先づ第一段として、インスピレーションや追想や思附きから生れた觀念が湧上る。次で其思想の建造を計劃すべき材料や資本や手段を考へる醱酵時代が來る。第二段として空中樓閣に堅實なる地盤を與へるために諸種の困難と鬪ふ、而して終に事業が成就するのだ。今、之を商業的想像に當篏めて考察を進めよう。

實業的計畫と言ふものは多數の分岐し且つそれ自ら相衝突する處の諸の要素を必要とする。例ば彼の亞米利加の穀物投機商の如き、世界の穀物輸出入諸國の農業狀態、降雨や乾天の具合各國の稅關稅表等に就て迅速且適確に知らざれば到底、好結果は得られないのである。此の雜多な事項を取扱ふ際、少許の誤謬が大なる損失を招くことにもなれば、又少しでも甘く合つたところを掴まうものなら、非常な利益を擧げるのである。此の事情（經過）と好機とを知らしめるのは直觀である。

それと其に、彼の攻擊防禦の戰術の如きものが其處に存在する計畫の突嗟の間に變更して臨機應變の處置を取るには常に、迅速にして適確なる瞥見を必要とする。取引きは戰爭の一形式である。總ての條件は此の爲めに必要である。序に戰爭をやる軍隊的想像のことを附加するならば、茲で、指揮官の取扱ふべきものは、（一）破壞及防禦の爲の武器、機械及び器具である。是等は時、處及び地の利に從つて變動する。（二）同じく變動的な人間的要素、卽ち兵士、（三）有名なる將軍より學びうる觀戰爭の一般的原理、（四）一種の「術」とも言ふべき甚しく個人的なる戰術や戰略の問題を解決する技倆、（五）最初及び總ての好機會に當つて、迅速にして正當なる直、（六）最後に創造的要素、コンセプション、自然的天分、之實に發明家の標證である。

ナポーレオンは『成果を約めるためには事柄を

長く熟慮せなければならぬ、あらゆる可能の場合を數ヶ月間も考へ通さなければならぬと語つた。ボンナール將軍はナポーレオンに就て次の樣に述べてゐる。

ナポーレオンの美學の基く原理は出來うる限りの範圍に於て嚴格な節約をなしまさかの場合全力を、躊躇せずに傾注するとにあつた。此原理が將軍の戰略を支配し、彼の戰術を導いた天才の骨子あると。

再び商業的想像に戻つて、要するに上に述べたものは結合的若くは戰術的想像である。此者は直觀と戰術とから作られるものである。商業的發明に必要なる今一つのものは前に擧げた、模型的表象とは如何なるものか。

それは具象的表象と純粹概念との中間物である。が寧ろ概念の方に多く接近してゐるものであつて意志活動によりて生れるものである。藝術家は多くは具象的表象によりて物の直接な表象（概念）を造るが商人の想像は直接物の上にも、亦直接なる表象の上にも働かない。其譯は最初の時期が經過すると、一般性の代理を勤めるからである。即ち、物（ディンゲ）が價値（ヴェルト）となり價値は又徽號（ツァイヘン）となるからである。物と物の關係の代りに數や文字が用ゐられ徽號で計算をなす樣になつて抽象的問題を解決すると同樣の狀態を呈するのである。要するに、商業的想像は其發展や建設に於ては、具象的表象を取りえない計算や結合から導かれてゐるのである。此點で、此種の想像は退縮（ツェルケムジング）した想像であると考へられる。

商業的發明の最後に忘れてはならないのは財政の頭腦である。財政的發明の目的は一個人の裕福若くは一部分の社會の裕福にあるばかりではない。大多數の、偉大なる國家の財政と云ふ樣な複雜な問題の上に働かねばならぬ。

總ての文明國の歷史には其財政組織に就て熟慮し好結果を擧げた人々の名が出てゐる、其組織と

云ふのは、彼の學者や哲學者に就て云はれるのと似た處のあるもので、精神的建築をなすべき或理想や基礎を必要とし其の上に立てられるものである。財政組織の一例として紙幣の組織を擧げることが能きよう。物々交換が物を代表する同價のPfand使用となり、次で人々は自身に價値なくして而も純因習的徽號を採用する時代が來なければならぬ、と望んだ際、財貨を代表する財幣が、ファンドでなくクレディットを與へる簡單な約束たる紙幣に代らなければならぬ、國家權力の印鑑によつて此事を成就したのは紙幣のシステムである。之は個人の本能的になしたことを組織的になしたのである。

吾々はリボーの所說に從つて商人の心理を伺つた。そして藝術家の心理と比較せなければならぬ場合となつた。

六・

藝術的想像は創造的想像である。創造的想像とは如何なるものであるか。それには先づ創造の意味から考へなければならぬ。創造とは、總てのもの、物であつても心であつても、皆、其れの活動の爲めには素材料であり、それに驅使せられるところの、積極的（肯定的な）精神的事業を意味する。それだから、『宗教家は神を原因、父となすが、藝術家は神を結果と見、子と見る』とマックス・ラファエルの樣に考へることも能きるのだ。

何故、藝術的想像が創造的想像であるかと云ふに、如實の現實世界若くは自然が終る處に開ける世界が藝術であり、之を造るのが創造的想像であるからである。人々はロンドンの霧を昔から見てゐた。不愉快な目障りなものと思つてゐた。しかし、ターナーやウヰスラーが之を畫にした。人々は其畫面を不思議がつて眺めた。そして其處に驚くべき美を見た。見たことのないものを見た。眼

が醒めた心持がした。初めてロンドン霧(フォッグ)を見たのだ。オスカー・ワイルドは『藝術が霧を發明(インヴェント)する迄は霧は存在しなかつたのだ』と叫んでゐる。その意は、人は物の美を見ない中は物を見たとは言へない。見た時に初めて物が存在を取るとの意である。茲に創造の意味が現はれてゐはしないか。フィドラーは眼の知覺から造形的表現へ移らうとすると、働が杜絶して了ふのが普通人である。が、其處に獨立的發展が視覺的表現に就て現はれて來るのが美術家である。美術家には或る表現運動の普通以上の發展がある。常人ではそれで停るところを美術家はそれから進んで行く。と言つてゐる。

普通人の見えないものを見、感じないものを感じ、聞きえないものを鳴くのは天才の敏感であると共に、之を表現しうるは藝術家の藝術家たる處である。クローチェは表現に迄達すべき、洞見、敏聽、敏感を直觀となし、直觀卽表現說を唱へてゐる。

此の直觀卽表現のメキャニズムは創造作用の示す特色である。併し『創造的なるもの(ダスシエッフエリッシエ)』を考へないでは其眞意が了解されないであらうと私は思ふ。

物があると思つてゐるが、あらしめる働きが作用して初めてあるのである。感覺となつて物が心的存在を取る前に、感覺そのものを生ぜしめるもの(働き)があらねばならぬ。それは實在論的客觀的心理學者が考へてゐるやうな外的實在でもなく又先驗的觀念論者の所謂先天的形式でもない。存在(ベグリエンデン)を存在附けるのは、『創造的なるもの(ダスシエッフエリッシエ)』である。決してそれは生產的衝動のなしうる處ではない。眞の充實は創造によつて得られる。芭蕉の閑寂の如き、(單なる)虛ではなくして實なのである。『創造的なるもの(ダスシエッフエリッシエ)』によつて人は日常の生活を、內的に豐富にしてゐるのである。外的に云へば生活資料を刻々に消費してゐるのであるが。

然るに他面、物質卽生活資料を產み出すことは、創造的衝動のなしうる處ではない。外的の豐富は全く生活的衝動の賜物である。斯くの如くして生產的衝動と創造的衝動とは相反し乍ら互に缺くべからざる相互扶助をなしてゐるのである。

『藝術とは創造的衝動が人に產出せしめるところのものである』とのマックス・ラファエルの意見を借れば、如何なる人と雖も、創造的衝動に動かされれば藝術を作ることが出來る、と云へると共に所謂藝術家といふ人も、創造的衝動の動かぬ場合、或は妨害せられた場合には創作は出來ないのである。

創造的衝動と生產的衝動とは相背反するとせば、生產的衝動が動いて來た時、藝術家の有する創造的衝動は損はれずにありえようか。又創造的衝動なしの製作は藝術品たりうるか。

外的の豐富のみに貢獻する仕事は藝術でない。世には、物品——財貨が藝術の名を借りて如何に夥しく生產されつゝあることであらう。而して存在を存在附け、眞の充實を助ける、創造の如何に乏しいことであらう。

存在を生產するのではなく、存在附けるとは存在の恒久化する（Verewigung）ことである。存在を現實流轉の相より永久常恒の相に移すことである。生產は橫に空間を顚充するが創造は縱に時間を充足するのである。

實業家と藝術家、を夫々、生產的衝動と創造的衝動との典型（タイプ）と見ることが許されるならば、兩者の活動の根柢は上の通りでなくてはならぬ。

次に此兩衝動は衝動たる以上、具備せねばならぬ深い心理があることを考へねばならぬ。それは價値感情である。從つて此兩衝動の働いた結果は、價値となつて現はれるのだ。而してそれは如何なる種類の價値であるかと云ふに、言ふ迄もなく一

つは經濟的價値、他は藝術的價値である。

生産的衝動が材料に向けられた場合、其の物質力を得ることが目的であり、目的は材料の中にあるが創造的衝動は、よりて以つて表現せられる精神内容を目的とし目的は材料の外にあることは既に明にして置いた處である。又、經濟的活動は生活の爲めになされ、藝術的活動はその爲めではない、活動そのものゝ中に獨立の意義を持つが、經濟的活動は生活の手段として方便的意義を持つも明白な事柄である。

然れば此兩種の價値の如何なるものであるかは直ちに察知せられるではないか。

經濟的價値は實用的價値である。藝術的價値は非實用的價値である。經濟的價値は効用の上に立ち生活の上に立つ。藝術的價値は効用の上に立たず生活の支持に役立ない。生活の手段として方便的意義を持つ經濟的價値は相對的價値であり、活動そのものゝ中に獨立的意義を持つ藝術的價値は絶對的價値である。

經濟的價値は時處の制裁を受ける現實的價値であり、現實的關係に於て判斷作用によりて認定せられる價値であるが、藝術的價値は時處の制約を受けない理想的價値であり、理想的關係に於て創造作用によりて生ずる價値である。

財貨は Price を持つが作品は Price を持たなゝ。あれば Value である。『多くの人は Price を知つてゐるが Value を知る人は乎だ』と言つた人（ワイルド）があるが作品は Priceless で、Value を持つものである。作品に Price 附けたがる人は果して其の Priceless Value を認めうるであらうか。

少し誇張して言へば、經濟的價値の意味に於て藝術的價値は價値ではないのである。（正に猫に小判である）生産的衝動と創造的衝動とが相背反す

る如く、從つて兩價値は相背反するのである。

しかし、兩衝動は相反し乍ら相互に缺くべからざるものである如く、兩價値もなくてはならぬものである。藝術的價値は、經濟的價値の意味とは違つた意味で價値であることは既に述べた處であり、人間には生産的衝動と共に創造的衝動もあることを知る人には、兩價値の存在は疑ふべからざるものである。而して廣く人類の生活、歴史及び文明の上に兩價値の缺くべからざるものであるとも亦承認しなければならぬと思ふ。それが如何にして又如何なる方面に於て須要であるかを檢べる前に、創造的活動そのものゝメキャニズムは如何なるものか、換言して藝術家の心理を今少し檢べて置かねばならぬ。

七

藝術の製作は絶對的價値を産む仕事である。理想的價値の仕事である。それだから、活動そのものゝ中に獨立的意義があるのみならず、活動そのものゝ狀態は無限の發展である。普通人が例へば一本の樹木を見るとする。その視覺的活動は樹の輪廓と色彩とを見ただけで終つて了ふ。然るに畫家に於ては單に外的存在としてそこに立つのではなく、彼に向つてその樹は複雜な線と色、姿體や構造を持ち大氣を振撼して彼に迫り來る。彼を動かして存在を主張せんとする。樹は要求を持つてゐるのである。そして樹が「そこに在ることの不思議」を彼に懸けるのである。斯くの如くして視覺は發展して行く。と共に畫家の世界が出來て行くのである。それではなぜ普通人の視覺界は單純で停止するのに畫家のそれは無限に發展するかと云ふに、畫家の視覺活動には統一があるからである。普通人は樹を樹として見ないで材木としたり薪としたり又は庭木としたりする。ぢつと見ないで直ぐ他の方へ眼を轉じ他のことを考へる。視覺

に專らでない。畫家は反之して專念にそれを眺め、對象に合體し純粹に見てゐるのである。用途の方に心を奪はれないで只管に見拔く。見ることの內に獨立の意義を認めてゐるからである。樹そのものゝ要求を感じてゐるからである。その存在を存在附けることを迫まられてゐるからである。創造的活動の中にあるからである。見よ！樹はカンヴアスの上に存在を主張しつゝあるのである。では何時それが出來上るか。

純粹に見ると云ふのは統一的無限の發展ではないか。しからば完結は何處にあらう。藝術は絕對的價値であり理想的價値であるからである。絕對的價値の仕事であるから、比較すべき標準がない理想的價値の仕事であるから、無限に追求するの外はないのだ。

實に藝術的活動は無限の活動である。ラファエルは『創造的衝動は根原的で純粹で、明に運動、機能のみである』と言つてゐる。統一的無限の發展である此活動は、藝術家を絕え間なく、そして死ぬ迄離さないのである。

純粹に見ることに就て云つたことが、聞くこと感ずることにも言へると思ふ。畫家の心理は解覺を加味すれば彫刻家にも當嵌る。純粹に聞くは音樂家の心理であり純粹に感ずるは詩人の心理である。純粹の見、聞、感が造形藝術、音樂及び詩歌となると云つたが、其の理由として私は存在がなす存在附けの要求——「創造的なるもの」を擧げたが、其の過程は何であるかを査べなければならぬ。審しき詮索は略し、其過程の心理としての直觀を吟味することにする。蓋し、リボーは實業的想像の主要として直觀を擧げて置いた。その直觀が藝術的想像と如何なる關係があるかを査べる必要があるからである。

前にクローチェが直觀卽表現說を說へてゐるこ

とを言つて置いた。彼によれば藝術は表現である。從つて藝術的活動は直觀に負ふ處の大なるを察しうるのである。其の重要な直觀はリボーが理解した意味――無前提無意識の推理とは著しく異なるものである。

クローチェによれば直觀とは elaboration of sensation たる表象（representign or imag:）なのである。此意味でなら確かに直觀は創造的活動たりうると思ふ。そしてリボーの意味では不可能と思ふ。だから、リボーは創造的想像の中には直觀を入れてゐないのである。當然だと思ふ。

扨て、純粹に見、聞き感ずる際、そのものゝ表象が、感覺の凝集よりして生じ來るは見易い道理である。クローチェは其の直觀が卽ち表現であり藝術品であると考へてゐるのである。しかし、表はされる表象は如何なるものかを彼は說てゐないがリボーはそれを詳論してゐる。

リボーの考へを撮めれば、表象に二た通りある卽ち造形的（プラスティッシュ）と放散的（ディフルイレンデ）とがある。換言して具象的と抽象的とである。互に相反したものである。此別々の表象によつて違つた藝術が出來る。卽ち造形的具象的表象より繪畫彫刻、放散的抽象的表象より音樂詩歌が生じる。小說脚本は主として前者の表象よりするものと後者のよりするものとがある。

八

實業家若くは商人の活動は活動そのものが目的ではなく生活の手段として方便的意義を持つのである。從つて、活動の心理は此方面からせばよく解釋能きはしないか。リボーが揭げた、商業及財政上の發明の外的條件が人間的、社會的であり、內的條件が先見、打算、理性の確定――約して反省の力と大膽、冒險心、未知追求の衝動――約して能動の力とであり、初發として直觀、發展として模型的表象（シエマティッシュビルド）の必要も要するに功利主義的色彩を

帶びてゐることを觀取せられる。

併し乍ら、實業家の活動は常に此の本流に始終してゐるばかりのものだらうか。最初は方便的意義しか認めなかつた活動が、活動そのものに獨立的意義を許すに至ることはありうることである。斯くて功利主義的色彩は薄らいで遊戯的色彩を取る。投機家（スペキュレーター）は正しく其好適例である。リボーは投機家の心理を說明して、實業家の有する理性要素が壓倒せられ情感的運動的要素（アフェクティヴモトーリッシュ）が勢を得、或は支配するに至つたものだとしてゐる。換言すれば彼の內的條件の中の能動の力が優勢となつて均衡が破れたものである。而して此の能動の力を支配するものは能動的感情要素なのである。

此の消息の中に一つ面白いことがある。投機家は一種の藝術家なのである。實業的活動が藝術的想像に轉じたのである。實業的想像が藝術的想像に移つたのである。而して之を惹起した原因は能動的感情要素若くは情感的運動的要素である。藝術的想像は能動的感情要素に支配せられてゐるものなのである。

此の能動的感情要素が實業的想像の一要素であることは、藝術的想像に一つの橋を架けるものである。實業的活動と藝術的活動とを繫ぐ唯一つの途であると思ふ。

しかし、廣い意味の經濟的活動との關係は、もつと親密なものである。之を親密なものにするのは機械家である。殊に機械發明家である。

藝術家の活動に必要な表象には、造形的具象的表象と、放散的抽象的表象とがある。此の抽象的表象とは chimere, Vaingmu jination を指す。此のものは明にか投機家の心を充たしてゐたものである。何となれば、此の表象は藝術に於て音樂及び抒情詩を形造るものであつて、情感的運動的要素であるからである。實業家必ずしも投機家ではな

い。寧ろ之は支流、變態である。實業家の活動を形成する表象は之とは別の理智的な模型的表象であるとリボーは說いた。

然るに、彫刻家畫家などの必要とする具象的表象は機械發明家の必要とする表象そのものである。次に少しリボーの考へを借りれば恁うである。機械的想像と美的想像（藝術的想像）とは略その想像作用の概觀を同うする。機械的發明にはよく、インスピレーションが動く。純なる製作衝動に動かされ利益護得の念からは離れ、恰も使命（ミッション）を帶びてゐる如く、なさねばならぬと感じる。

上代では發明者を神として尊崇した。プロメシュースはその一例である。（Hephästus, Tripotolemus, Dädalus, Ikarus）次に機械的想像が構成的想像（Konstruierende Phantasie）であり、萌芽の發生する趣を取るを準備、頂上及び停滯の時代——先驅者、大發明家及び改良家の順序を持つこと、などを擧げてリボーは美的想像との間には根柢に自然の合一があると云つてゐる。

が其目的（タヘクク）に於ては、生產的衝動の面目を示すのである。此者は實用、効用、機能に向けられ夢想や感情の爲めではなく、自然力の征服、變革を目的としゐるのであつて、自然の研究ではない。夫れだから、自然の恩澤のみの下に生活せる自然人が、其事情の變遷に伴つて得た最初の心的活動の一つと見ることが能きると私は思ふ。卽ち、機械的想像は生產的自然力の補充手段の一なのである。動物の使用を考へ自然力の利用を工夫したのは此想像の賜物である。

尙之に續いて美的想像と異るは、其方法（ミッテル）に就てである。機械的想像は客觀化する。美的想像は現實から離れて自由に主觀的個人でありうるが、之は何時でも現實でなければならぬ、決して美的想像の如く目的をその中に持つてゐる自由な創造で

あつてはならない。しかし美的想像は自由であると云つても、捉へ處のないものではない。その想像は客觀化はしないでも固定化する。

機械的想像は強き條件の下に置かれてある。強き物理的條件に從ひ、自然的決定觀(デターミニスムス)に從はねばならない。美的の方は大いに自由である。

九

愈々最後に、生產的衝動と創造的衝動の人類の生活に對する意義を一言したい。

テッソワールが「生產人」と「製作人」との存在を說き前者は人類種族の維持の爲に生れ、後者は或事業成就の爲めに存在すると見、前者は維持生活を後者は向上生活を營むと言つた。此意見を直ちに此場合に轉用してよくはないかと私は思ふ。

同時に兩衝動よりする兩價値を生活に對する意義として考へてよいと思ふ。それと共に生活そのものゝ意義も豐富になり擴充すると思ふ。

孰れが大切であるかとか高等であるかと問ふ人は手と足の値を規めようとする人である。互になくてはならぬものであり相寄つて意義を持つのである。文明は兩者相寄つてなる處のものである。一つが勤勉で他が遊んでゐるのではない。創造的衝動は遊戯衝動ではない。生產的衝動は保守的衝動(退嬰的動衝)ではない。

附言 價値に就ては別に考へたことがある。未熟ながら曾て大正三年十二月乃翌十二月の哲學雜誌に述べた處もある、今の題目の下でも、もつと深く經濟的價値と藝術的價値とを論じなければならぬが、余り長くなるのと、問題の擴張とを忌むために玆で擱筆して置く。序に

Münsterberg; philosophie der Werte

Simmel; Philosophie des Geld-s

なぞの考へは是非とも考察の中に加ふべきものであつたが之も前の理由で割愛する。